

<b>Title</b>	杉本町校舎返還ニュース(No.1)
<b>Author</b>	安竹, 貴彦
<b>Citation</b>	大阪市立大学史紀要. 11 卷, p.66-75.
<b>Issue Date</b>	2018-10-31
<b>ISSN</b>	1884-3522
<b>Type</b>	Others
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学大学史資料室
<b>Description</b>	
<b>DOI</b>	

Placed on: Osaka City University

## 《史料6》

## 杉本町校舎返還ニュース No.1

[表紙]

杉本町校舎返還ニュース No.1

1953.11.20

杉本町校舎全面返還実行委員会

序	一頁
I. 実行委員会の成立	二頁
II. 六・二六全学総決起大会	二頁より四頁
III. 市中デモと署名運動	四頁
IV. 夏休中の運動	四頁より六頁
V. 市会の動き	六頁
VI. 実行委員会の考え	六頁より八頁
VII. 校舎返還の見通しについて	八頁
VIII. 会計報告・後記	九頁

## 序

校舎返還の運動が起きてから、もう半年になる。しかし最近一部の学生からは、この運動はど  
うなっているのだろうかと云う声が強くなり、この声は、実行委員会そのもの、不信に迄発展  
しつゝある。我々は、このような事情を知りつゝも、我々自身の優柔な決断力と日和見的態度  
のため、適切な手段を取り得なかったことを深く反省するものである。かくして我々は今迄の  
行動と指針を全面的に述べて、再び強力にしたいと思い、一ヶ月程いろいろ準備をして、その  
成果をこゝに発表する次第である。この発表にあたって、この形式・内容共に貧弱であることを  
我々は率直に認めよう。しかし我々はこの発表について各クラス各サークルが討論を徹底的  
に行つて返還運動を身近なものと感じる一方その批判を通じて我々の在り方を示してもらえた

らと思う次第である。第二号には之をめぐる声を広く集めたいと思う。尚、その中には、夏休中、郷里で署名八〇〇数十枚を集めたM君の苦心談を載せて諸君の一つその奮起を促したい。

### I. 実行委員会の成立

新教育制度の第一線を行く昭和二八年度生が、真理を求めるための大学生活にときめく胸を押へながら、この大阪市立大学の門をくぐったのは確か今年の四月だったと思う。高校でのつめ込み勉強から解放された我々のその希望に満ちた輝かしい前途を、市大は何を以て迎えてくれたろうか。

金網に囲まれた外国地の中の杉本町校舎、学園生活のドン底を物語る靴校舎の壁新、都会の騒音に妨げられての一〇〇分授業ではなかったか。そんな授業すらやむなきアルバイトのために受講できぬ学生の状態であった。彼らが真<sup>(マ)</sup>険に講義を聞かんとしても、教務の掲示板上は「休講」の二字を以て返答する。よしアルバイトに資金をえて再び受講せんとしても、校舎の分散のため先生並びに一部生徒の一五分、二〇分の遅刻は全く当然のことと成ってしまった。諸種の証明を作ってもらおうく教務に行っても、係員は、労働強化のため額に青筋をたて、たゞやたらに多忙を極めているようだ。或る人の話では、係員一人に対して学生一〇〇人も扱かわねばならないそうだ。

いやしくも公立大学の雄者と世間が認め、且つ我々も自認する当市大が何故にかくも荒廃した学園生活を送らねばならぬのか。市大に勉強する学生ならば、この義憤を感じるのは当然だ。文教予算を無視し、たゞたゞ軍事費のみを予算と心得て、旧日本軍国主義者が我々をかくも苦しめている意識的過失を再び犯そうとしているような現状にあまつさえ、これも病院と云う甚だアヤシゲな理由のもとに我々の校舎が接収されているところに苦しみの端が発しているのだ。各自の憤怒の情がこの点に集中するや、自発的な討議が、各クラス、各サークル毎に行われ、之と相呼応して、地元浅香町の人達もこの方向に同調を示さんと動き出した。このような学内外の空気が、たまたま社会科学概論の時間、一学生委員の点火によって烈火の如き討議が展開された。之に相前後して法学部一回生、文学部一回生などの教室討議も興り、こゝに要求され、築き上げられたのが、この杉本町校舎全面返還促進実行委員会であった。あらゆる要求に優先して決議され、あらゆる主義主張を超えて、この校舎返還運動を心底から湧き立たせ、支持し、自発的に協力したことは、この運動の前途を輝けるものとした。

### II. 六・二六全学総決起大会

「校舎返還実行委員を各所から結集させよう」と云う主張が、唱えられて以来、志を一つにする者の結晶が、時々刻々と拡大拡張されていった。靴学生委員会では直ちに学生大会を開いた。席上、市会議員や、教職員の方も見えられ、二階の講堂は、討論の場と化した。緊張した空気は何時果てるとも知らず、壇上で雄然と煙をふかしていた某市会議員も、いつか身体を乗り出

して応答するにいたった。或る者は、外国軍隊の即時日本よりのてつ退を要求し、又或る者は、日米行政協定の破き、再軍備絶対反対を唱えた。しかし一般学生には、そこまでは理解してはおったが市民に及ぼす効果的面からの意見でなだめる者や、純然たる政治運動と見なして真向から反対する者、或いは腕を組み頭をたれ、じっと沈黙を守る者、と云う工合に現代学生の苦悩の姿が一場の中に集められた。しかし「我らが学園を我らが手に返せ」と云う要求は、超階級的、超イデオロギー的存在として、各自の切ない心底からえぐり出されたのだ。市議諸連もこの運動が達成されるよう、全力を挙げて協力する旨約束せざるを得なくなった。遂に「杉本町校舎に全学挙げて結集しよう」と一事項が提案されるや否や、議長の採決をも待たず「異議なし」「賛成」「よし行こう」と満場、決意に満ちた興奮のるつぼと化した。その大会の名は「全学々生総決起大会」と名付けられ、早速、実行委員会、学生委員会を中心に「全学々生総決起大会実行委員会」が作成された。すべてのクラス、サークル等からの自発的な活動は、全学結集にこの上もない大きな役割を果たした。大会実行委は渉外係、情宣係、企画係、会計係などを設立し、その係の係員に成らんと志す者は、日に日にその数を増加して行った。ところが、このような真険な自分達の要求のかく得運動をさえも白眼視して、その日その日を青春の享楽に身を委ねていた者のあったと云うことを我々は忘れてはならない。会計係から訴える日毎のキャンパスも、ボール箱や学帽を一杯にしてくれた。この資金の例え五〇銭であっても各自の貴重なアルバイトによるものかと思うと実行委員の活動にもよりいっそうの奮気を促さざるをえなかった。かくして渉外係の調査はその報告がカベ新となって表われ、情宣係のビラは五つの校舎に散布された。その中には、学生委員の熱心な交渉にもかかわらず、学校当局は、その日は休講にしない旨、学生が一番気になるころであった。だから実質的には休講にせねばならないと、実行委員も苦心していた。それらを目にし耳にし実際にタッチしてみる学友、教職員の顔には、前述の容易ならぬことを覚悟し校舎返還の決意をより深いもの、より強固なものとしていった。遂に来たるべき日はやって来た。それは忘れもせぬ昭和二十八年六月二十六日。前夜からの奮闘に実行委の顔には疲労の色が見えたが、バスのドツパラに巻かれる青、赤、黒の三色の文字は、バスおそしとばかりにはためいていた。真紅で書かれた「大阪市立大学」の文字は、血を噴き出さんばかりに燃え、黒色の「杉本町校舎を返せ」は、終戦以来八年間塗炭の苦悩にあえぐ市立大そのものを表現し、空と海とが溶け合ったような「全学総決起大会万才」は冷静な学生運動の質的变化を匂わすが如きであった。道行く人の異様な表情を後へ〜と、学生、教職員満載のバスは、家政から、理工から、明治、靱から、一路杉本町へ杉本町へ<sup>(ママ)</sup>と漠進した。横文字のアーチを隣に見、杉本町のよき姉達にスクラムと歌声で迎えられ、早や講堂には、一〇〇〇有余の学友がぎっしりと講堂を埋めていた。それでもなお、バスに乗ることができなかった理工の学友が、三々五々と後をたえなかった。ところが、こうゆうような我々の集会にさえ四〇人有余の武装警官が、待機して我々を見守っていた。いかに彼らの要心振りが見事であり、且つ彼らの背後権力の弱体化していることをあんにこゝにもほのめかしているではないか。そんなことにはおかまいなく、種々の報告、メッセージも円滑に進み、いよいよ真剣な討

論が開始された。折しも二つのスローガンが正面にかゝげられていた。一つは「内灘を救え」他の一つは「杉本町校舎即時全面返還」であったと思う。靱学生大会の時と同様、この点に対する議論がふつとうし、遂に「内灘を救え」は降されてしまった。何故ならば、杉本町校舎も内灘も、日本全土をさん食する軍事基地の一つであって、本質的には何ら我々の運動と変るところはないが、その規模に於て、その政治的色彩に於て隔段の差があり、全学の学生が全員結集するには、この大会のスローガンとして不適當であったからだ。これらは、非常に微妙な点だけに今日なおいっそうの研究が要されよう。「杉本町校舎即時全面返還」には、之を積局的に推進させることにつきたマ一人の異議あるはずもなく万雷の拍手で可決され、満場は云い知れぬ決意の態がみなぎった。も早消極的な市会や、政府にはまかしてはおけず、できうる範囲で、我々自身が活動しようと主唱され具体的には、市会への陳情デモを行うと共に広く大阪市民に訴えアピールしよう。今迄学内中心であった署名運動を外に出し一般人に協力をお願いしよう。などが決議された。いずれも万雷の拍手、満場一致で可決され、我々の前途に陽光を見出したものの、何か一つだけわり切れぬものがあった。

それは、学校当局が、学生と共にこの返還運動を推進することに不同意であって、当局は当局のみでその開拓にあたると云う点であった。

「従来は、学生と共に運動を行って来たが、とにかく学生は、その方向に対してマイナスせしめることが多く、学校は学校として、日米合同委員会とか、外務省だとかの学生では仲々むつかしい所を受け持ってやって行く」と云う意味のことが云われて、しぶしぶその場を辞したのではあるが、決して初志を捨てたのではなかった。決起大会の時にも、遂に休講になったのは、自分達の正しい目標に対する正しい行動のその団結力が強かったことと共に、教職員の方々の、温かな計らいがあったことも忘れてはならない。

### Ⅲ. 市中デモと署名運動

杉本町校舎全面返還総決起大会で決議された市会への陳情デモは、七月四日（土曜日）午前十一時、小雨そぼ降る中をプラカード、ノボリを手に、約一五〇名が市中デモを決行した。学校一信濃橋一肥后橋一梅田新道、こゝから南下して、御堂筋を通過して正后大阪市庁前に到着すると云うデモコースを取り、降りしきる雨も「平和の歌」「杉本町校舎ソーラン節」などを高唱の中に十一時四〇分、中之島公園で各校より計五名の代表団を選出して、市会へ陳情書を提出返還運動に対する市会の回答を要求したが、その結果、市会議長と、文教委員の支持、回答を得た。共産党の神崎市会議員の激励を受け、之は、我々の運動に大きな勇気を与えてくれた。又（右派社会党）伊藤文教委員長は、市庁玄関で待っていた参加者に対し「中学校の校舎難を解決するためにも現在使用中の校舎を明け渡して中学校に転用するためにも杉本町校舎の返還のために努力したい」と述べ、全面返還に努力する旨を表明した。この後一時三〇分頃から梅田、難波、上六、阿倍野の各ターミナルに分散して五時頃迄署名運動を行い、二〇一八票の署名をかく得た。之を契機に、学生各自居住地で署名運動にのり出した。現在迄に集められた

票数は七〇〇〇に達している。

この陳情デモは、あくまで合法的なものであったし、又学生らしい校舎返還運動としての示威行動であったと云う点、大いにこの運動に対する一般市民の関心と促進への協力を得たと云うことができる。しかし雨天とは云え、学生のデモ参加者の少なかったことは、遺憾である。学生各自が反省しなければならない点であろう。運動の停滯<sup>(ママ)</sup>、之は、今後の大きな課題であろう。

#### Ⅳ. 夏休中の運動

七月二〇日、実行委員会は夏休によってその活動が中断されるのを<sup>(ママ)</sup>原念して、夏休の行動を定めるために開かれた。その時、署名運動については従来の方針を再確認して、強力に自分の周辺に署名を行う一方、地方に帰郷するのを利用して、それぞれの地方で署名を取って、「校舎返還」の中を拡大することに定めた。他方当初準備していた資金も、署名用紙、バス借用などに殆んど使われ、残りは、わずかになった。夏休後、東京に代表を派遣して外務省、その他、政府機関及び日米合同委員会に我々の窮状を訴えて返還を促進し、更に全学の意志を統一するためパンフレットを出すことを中心とした運動をするには、資金の裏付けが必要なので、その充足を夏休中にする意味で同窓会にカンパを訴えることにし、四名の代表者を選んだ。四人で同窓会名簿から四〇名程ピックアップして、二組に分れてカンパを始めることにしたが、カンパをするには学校及び同窓会の公然たる支持のあることがあらゆる点で便利だと思って、まず同窓会々長に会って実行委員会の立場を述べて協力を頼んだ。会長は資金の点は一存で決められないし、返還運動は個人的ルートでその筋と交渉して来て同窓会がこの問題に無関心とは云えない事実に同窓会の正式の態度は江波顧問と相談してみると云う話で、その後江波さんと会った結果、総会の議決を経ない以上資金は出せない。又更に支持を公然としづらいこと、又同窓会は別個で行動することに確約を得、一応同窓幹部との話はこれでうち切った。次に、学生課長と数回懇談した結果、学生課長の紹介状をもらってまわることにした。

他方夏休中の活動を円滑にするための常任委員会を作り、学生委員室に毎日必ず連絡者を一人置くことにした。併し七月以降連日の大雨は九州、和歌山に水禍をもたらし、特に和歌山の場合は同じ近畿内であり未曾有の大惨事を呈しているため、学生委員会は急きょ同地の救援を決意して、大量の学生を動員した。このため常任委員会も実質的には、分裂状態になり、組織と活動は麻痺状態に陥ったがこれは仕方がないと思う。従ってカンパ活動は組織的よりも個人的行動に限定されてしまったので、集金高も予想をはるかに下まわる一七〇〇〇円に止った。夏休中の我々の行動の結果は前に述べて来た通り、署名と同窓会との関係に集約される。署名は献身的人達の活動と相まって合計七〇〇〇を数えるに至った。

特にこの中にあって、E IIのM君が郷里のG県で母校及び附近の高校を利用して八〇〇を集めたことは以って範とすべきでとにかく実行委員会を奮起させた。次に同窓会との関係であるが、当初はカンパに行った時話はすらすらと運び行かれるものと極めて楽観的見方に支配されていた。しかしカンパ活動を通じて我々の行動に独善さのあったことを批判せずにはおれなかった。

流石に同窓会員は実業界に活躍される丈あって「運動しても無駄だ」と云う敗北主義や無抵抗主義は全然見当らなかった。時丁度全世界の人々が熱望していた朝鮮戦争の休戦が成立した直后でもあって、世界の緊張がゆるめられつゝある時、当然軍事施設は撤廢の方向に向けられるべきであり、特に病院関係はその意義が失われるので客観的には極めて有利であった。そこで誠意を以ってあたれば必ず返すし、又返さなければならぬと云う確信の下に、校舎返還の時を早める意味で効果的に行動してもらいたいと云う点ですべての人は共通していた。その反面一般同窓会々員からは、何故学生、学校、同窓会の三者を一括にした機関ができないか更にその方に努力しないのかと云う点に疑問が強かった。特にカンパに馴れて親しく話をするようになればなる程この問題は学生や学校や同窓会が個別に関心を示す種類の問題ではなく、関心を統一しなければならぬ問題であり、協力しなければできない問題である。そこで「何をすることも統一機関の結成にある」意見が支配的になり、これに努力を惜しまないと云う先輩のでられたこともこの問題の核心を示すものである。ではこれが何故できないかと云うと、各幹部は学生が政治運動に走りがちだと云うのを理由とする。勿論「杉本町校舎返還運動」は本質的には軍事基地撤廢運動であるから我々の運動が假令穩健であって無用の刺戟をさけても政治運動だと云う非難を全面的に否定することはできない。特に学生運動が最近日常の生活要求を問題とするに至っても既成観にしたがってとかく色眼鏡で見られがちであるから、我々の運動を反米の宣伝の一環として「杉本町校舎全面返還促進宣伝実行委員会」と思いすごされる人のいるのもあながち無理とは云えない。我々はとかくこの偏見を過大評価してこれを否定する面を軽視していたので、同窓会及び学校当局との交渉に消極的にならざるをえなかったが「統一機関設立以外に返還の実はありえない」「根気強く誠意を以ってやればできないことはない」ことを再確認して、これにしたがうことが必要と信ずるに至った。

夏休が終わってからは、組織が確立されていなかった弱点がこゝに集中的にバクハツし、その上実行委員会以外の仕事、大学祭、語学の試験などが重って実行委員会の組織的活動ができなかった点我々は大いに批判しなければならないと思ひ、今后このようなことがないように注意しなければならぬと思う。

## V. 市会の動き

先に述べたように市会へ「杉本町校舎返還」の陳情文を提出して、七月下旬市会は満場一致でこれを可決して、市当局もいろ／＼調査した結果十月に成って、大阪市会議長粟井岩吉氏の名で総理、外務、文部各大臣あてに「大阪市立大学々舎全面返還促進に関する陳情書」を提出して、政府に返還促進を要請した。この中で市会は市大の沿革を述べつゝ第二次大戦末期海軍に徴用されひきつづいて敗戦後は進駐軍の全面的接管に会って以来、新制大学と云っても中学校小学校に分散すると云う悲劇に悩まされたが、それから解放されるため鋭意返還に努力した結果、サンフランシスコ条約を機に二十七年八月一部返ったものの、依然その悩みは解消されず、漸くこの問題が全市民の声になりつゝあるとき、この問題をこのまゝ放任することは日米感情

に悪いいきょうを与えるものと思われこのため、適切な方法で返還の実を上げるよう努力してもらいたい旨述べている。

今回、市会がこの陳情を持って政府に当たったことは、我々の「校舎返還運動」を大きく飛躍させ、この運動を全市民の問題に発展させるのに努力した点大きな意義があると思う。

しかし市会の今回の<sup>(ママ)</sup>動きは、市会自らの意志で自然発生的に生じたものではない。この意味に於て市会の動きは市民の利益を守り市民の総意に従う善意プラス市大学生の圧力と解されよう。このことは校舎で一番苦しむのが学生である以上当然のことである。こゝで我々はこの運動を進めるのも後退させるのも皆、我々の一つ一つの行動にある点、再確認しよう。

## VI. 実行委員会の考え

現在、京都に於る学園復興会議を中心として「平和で豊かな学園生活」のスローガンの下に、全国的に学園復興の積極的な活動が展開されつゝある。この中にあって我大阪市大に於ても、大小幾多の要求が山積されているが、何と云っても、基本的なそして最大の要求は、杉本町校舎の即時全面返還であろう。このことは、六月の総決起大会に於ても、ほとんど全学年の一致した要求であり、それ故に現在の学園復興のポイントとなっているのである。

このような認識の上に立って、我々は六月以降現在迄の行動を振り返って見る必要がある。そこにはいろいろな成果と欠かんが現れて来ている。成果として最大のそして具体的な形となって現われたのは、大阪市会に於て、我々の要求を取り上げ、自由党を含めた各党派が一致して返還運動へ動き出したことであろう。我々は、この点に関する評価の過少してはならない。と云うのは、今迄の運動が、とかく学生内部を一步も外へ、ふみ出すことなくして行われていたことについて、現在の状態は、単に学生だけの問題ではなくなっていること、又、広く市民に訴えるだけの、国内的、国際的な条件ができてきていること、そして又、学生だけの問題にしたのでは、とうてい我々は返還不可能なこと、などの条件があるからである。

その他、様々な成果はともかくとして、次に我々は、この斗いの中に現われて来た欠かんについて、それらを明確にすることが重要である。

○第一に、運動の長期的性格にともなって、極めて悲観主義的な傾向がうかゞわれることである。

このことが、夏休以降の返還運動を停滞させ、実行委員会の組織的弱体化の要因の一つであることは否めない。

○第二に、委員会と学生との間のでっぴ的な連絡、討論の欠除<sup>(ママ)</sup>であった。

このことは、すでに六月の決起大会の時の「内灘」のスローガンをめぐって実行委のうき上りが現われ始めていた。

○第三に、この運動が、学生内部に於て、靴の学生のみのはね上りを示し、同じ要求をもっている家政・理工が立ち上れなかったことである。

○第四に、学生自身の、実行委員会に対する厳しい批判と、建設的なツキアゲがなかったことである。

実行委員会のメンバーは、各学部、学年、サークルなどから、民主的に選出され、或いは承認された者である。したがって実行委員の自主的任務と同時に、それに対する学生全体の監視が必要である。

○最後に、我々は、夏休に行った同窓会に対するカンパ活動を通じて、統一組織を設けての統一闘争の必要性と、その欠除の弱さを知った。

この点は、非常に重要である。最初に述べた如く、学生内部の問題として止まっているかぎり、この闘いは決して発展しないし、又できないであろう。

学生は学生、市会は、市会、学校当局は学校当局、同窓会は同窓会、と、同じ問題に対して、個々バラバラに運動して行くことの無駄を、無意味さを、はっきりと知る必要がある。

以上、大ざっぱに五つの欠陥を指摘して見た。この中から、自から、我々が次にしなければならぬ行動がでて来るのではあるまいか。

たゞここでは、最後に述べた「統一闘争の強化」について具体的な提案をしたい。

即ち、学生、学校当局、同窓会、市会の四者統一返還委員会を早急に作ることである。そして、できれば、恒藤学長が先頭に立って闘ってもらいたい。実行委員会は、この四者統一組織を作る素地と条件とは充分にあるものと考えている。この四者は、各々が多少は異った意見と方法とを持っているであろう。しかし、市大を愛し、市大をより良く育てようとする点では一致している。この一致点を我々は重要視しその中から生まれてくる力の大きさに対して充分な評価と確信とを持たねばならないのではなからうか。

杉本町校舎全面返還の道は多難である。しかし我々は、悲観主義と闘い、学園復興の集約物であるこの運動を最後迄闘い取らねばならない。

全学の学友諸君、京都に於る「学園復興」に加えられた弾圧は、決して他人事ではない。我々の切実な要求である校舎返還運動の上にかかって来た弾圧でもあるのだ。そしてこの校舎返還運動を闘い取ることがこの圧迫に対する我々の答となるであろう。

今こそ我々は、更に更に力強く団結し、運動を展開させて行こう。

なお、この項を中心として、教室討議なり、或いは話し合いの資料として下さい。そして、建設的な批判を、どしどしお寄せ下さることを心からお願い致します。

尚、最後に、実行委員会のメンバーは、責任と誇りとをもって、ますます積極的に活動して下さいようおねがい致します。

## Ⅶ. 校舎返還の見通しについて

返還の見通しについて、我々はそれを十分に検討できるだけの資料を持っていないし、又、それを机上で論じることが不可能であろう。

しかし我々の知っている範囲で、又行動して来た範囲で考えてみることは、無意味なことではない。

夏休以前に於る、市当局、ないしは政府のそれは、「朝鮮休戦が実現すれば、情勢は好転する

のではないかと云うことであつた。たゞしこの前に知っておかねばならぬことは、アメリカ側の原則として、学校施設は、優先的に返還する。しかし、米軍の使用している病院施設は、優先的に占領を<sup>(ママ)</sup>経続する。と云うことである。

この観点に立てば、前述の政府の意向もあながちデタラメとは云えないかも知れない。そして我々も又、それに対して、或る程度の希望的観測を持っていた。だが先日の大阪市会の決議によって、上京し政府と交渉して来た、市会文教委員長の話によれば、政府としてアメリカ側の態度には何らの変化もなく、全面返還の見通しは困難である、との回答であつた。一方、我々の見聞する範囲では、杉本町基地の病院としての使用度は、非常に減少してきている様子で—これは当然のことであろう—一方、ヘリコプターの出入、グラウンドでの訓練などから見て、純然たる基地の性格を強化して来ている様子である。我々は、この点に対してははっきりさせ、彼らの弱点をついて行く必要がある。

先日の朝日新聞に依ると、同じ問題で悩んでいる日赤病院も、収容患者が減っている点について、返還運動に立ち上がっている。この意味で、日赤との連絡と、ていけいとを強力に推し進めて行く必要を感じる。

現在、学校当局、市当局は、全面的な返還の困難であるとする見地から本館東側のグラウンド返還についての交渉を進めている様子であるが、あまり発展していない様である。

以上が状況のあらましであるが、調査、連絡、人手の不足からこの程度のことより報告できない。しかし我々は、なおかつ占領状態を経続している、そしてそれをさせているアメリカと、政府の不当さと「校舎を返せ」と云う当然すぎる程当然な我々の要求とに確信を持って、悲観主義に陥入ることなくこの運動を強力に推し進めて行かなければならない。

我々が黙つていては、杉本町校舎は永久に帰らないであろう。

—以上—

#### 収入の部

自治会よりの借入金	29,875-
学内カンパ収入金	2,897-
学外カンパ	17,000-

#### 支出の部

更半紙	2,208-
掲□用紙	100-
交通費 (タクシー、電話etc.)	2,315-
マイク (一揃え)	2,500-
大会、デモの為の諸費用	2,647-
印鑑	490-
名刺	180-
領収書	60-
大会用オート三輪	1,560-

人絹	2, 340-
墨汁	810-
実行委員会ニュース費用	600-
〃　パンフレット	2, 6〇〇-
ハガキ代	4, 495-
バス代	16, 550-
<hr/>	
49, 772-	39, 457-

### 後記

第一号を、こゝに送ります。

周囲の絶大な期待に応えられたかどうかは、私達にはわかりません。しかし、これが出ることによって、私達の運動が、飛躍的に発展するとの考えにたって、未経験と云う悪条件を克服し、[(評判?)] たおれしないように、歯を食いしばって来ました。この私達の考えが、皆に反映したゝめか献身的に□(之?)に従事する人 [(の周囲?)] に沢山の人を□□(結集?) することができて、第一段階の成果は、予想通りかくとくできました。

欲を云うと、まだ個人的プレイの域を脱していないことです。第二号では、もっと組織的に、一般的に広めたいと思います。

一番私達を苦しめたのは、表紙の図案でした。第二号を出しますときには、皆さんの中から生まれてきた図案を、是非載せたいと思っております。

尚、このパンフレットに対しての御意見を、特に建設的なものを沢山おねがいたします。

大阪市西区靱中通二丁目

大阪市立大学 靱校舎内

杉本町校舎全面返還促進実行委員会